だれが描いたか謎がとけた 壁画《クリスタル・リバー》の画家サーレにきかれたこと

20年以上疑問だった問題が解決した。平成9(1997)年、心斎橋の地下街「クリスタ長堀」がオープンし、西地区の壁面に新表現主義の画家デイビッド・サーレ(1952~)の壁画《クリスタル・リバー(Crystal River)》が設置された。文楽の人形や灯台、婦人物手袋、切ったレモン、鳥や蝶などがコラージュされた縦4.71m、横17.94mの大作である。

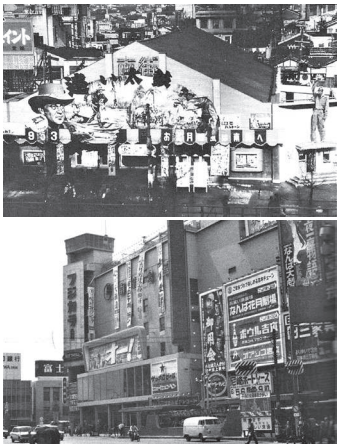
当時、大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)のメンバーとして私は、サーレの取材に同行したが、道頓堀や千日前で映画館の絵看板を見たサーレは、とても驚き、自分の作風に似たものを感じたのだろう、誰が描いたのか、描いた人を紹介してほしいと言ってきたのである。

取材中の冗談めいた話でもあり、その場はそれで終わったのだが、最近刊行された『昭和の映画絵看板 看板絵師たちのアートワーク』(監修・岡田秀則/企画・貴田(きだ)奈津子、出版・トゥーヴァージンズ)で、誰が描いたかの謎がとけた。

戦後、ミナミの劇場街の看板を手がけたのが貴田不二夫が創業した「不二工芸」である。貴田家には、同社が手がけた昭和22(1947)年以降の膨大な看板の写真が残されており、同社二代目の貴田明良さんの娘である奈津子さんによって、この本が企画された。

ページをめくると、「風と共に去りぬ」「エデンの東」「ティファニーで朝食を」「十戒」「2001年宇宙の旅」「アンナ・カレーニナ」など洋画や、「七人の侍」「君の名は」「キングコング対ゴジラ」「旗本退屈男」など邦画の絵看板が並ぶ。映画館では、千日前のスバル座、東宝敷島劇場/敷島シネマの看板が多く、千日前セントラルや道頓堀の浪花座、松竹座などもある。私ごとで恐縮だが、本書に絵看板が掲載されている昭和40(1965)年の「メリーポピンズ」、昭和42(1967)年の「ドリトル先生不思議な旅」は、写真にあるスバル座で見たはずである。

2大怪獣の最初の激突はこの時。「キングコング対ゴジラ」(1962)東宝敷島劇場/敷島シネマ



昭和28年の南街劇場(上)と昭和39年の南街会館(下)。下の建物はご記憶の方も多いだろう

映画館の写真として古いものでは、昭和28(1953)年の南街劇場が貴重だろう。小学1年生のとき私は、なんばマルイになる以前の南街劇場(現在TOHOシネマズ なんば本館)の「モスラ対ゴジラ」(昭和39(1964)年)に連れて行かれたのが、怪獣映画を見た最初であったので怖かった記憶があるが、掲載されているのは、その南街劇場の一代前の建物である。戦前、この裏側には南地(なんち)演舞場があった。

また、貴田明良さんと看板絵師である岸本吉弘、松原成光、伊藤晴康さんらの座談会もとてもおもしろい。

白ペンキを塗って作った大きな看板の下地に、幻灯機で小さな資料を拡大投射して輪郭を薄墨で描いていく技法や、ベニヤを切り抜いて立体的に見せる「切り出し看板」や絵の具の作り方、アラン・ドロンやオードリー・ヘプバーン、エリザベス・テイラーの顔は描きやすいが、平板な日本人の顔は難しいことなど、看板絵師の裏話が満載されている。貴田さんは、映画絵看板資料のアーカイブ化と閲覧可能なwebサイトの制作を現在進めている。

デイビッド・サーレは、「泥絵」とも呼ばれる看板絵の味わいに魅せられ、こうした裏話を聞きたかったのだろうか。あるいは「クリスタ長堀」の仕事を手伝わせたかったのだろうか。あのとき誰が描いたか分かっていれば、看板絵を媒介にして別の面白いアートの展開が生まれたかもしれない。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス/モダン都市の現像―』(創元社)など。